ソムニー

小林　征爾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソムニー

【Ｎコード】
Ｎ２６３８Ｌ

【作者名】
小林　征爾

【あらすじ】
超高速進化の時代に生まれた三人の高校生、ルイ、飛鳥、そして吉本・レイド・一樹。そんな中ルイの見た夢は、三人を、そして世界の歴史すらも揺るがすほどの大事件へと発展していく・・・・

光陵高校文化祭（前書き）

全てはあの夏の日、あの教室から始まった。愛する人、友人、力、歴史、そして、悲しみ。

光陵高校文化祭

「ねぇ、ちょっとあんたちゃんと聞いてる！？」
そう言って飛鳥はいつもの明るい調子で僕を見上げていた。
「聞いてるよ、うるさいな。」
慣れたやり取りはここ2年間も続いてる。僕はじっと見上げる飛鳥の目線に耐え切れずに窓の外に目をやった。
「じゃぁしっかり聞いててよ。あたしは今から綾子と穂花と一緒にシロップの買出しに行ってくるから、あんたとあそこの2人と一緒にちゃんと店番しててね。サボったらダメよ。ちゃんとやっちゃんに見ててもらうんだから。」
そこまでザット言い終えると飛鳥はどうやら満足したらしく、教室の扉の辺りでニヤニヤこっちを見ている二人組みの所へと駆け出していった。二人に合流すると飛鳥がこちらをじっと見ている視線に気付いたが、やり過ごすことにした・・・かったのだが、こちらが無視するのを極端に嫌がる飛鳥の機嫌を取っておいて俺に損はないだろう。右手でシッシッと、古代日本人から脈々と伝わる不快感を最も簡単に表す行為を烏合三人衆に向かってすると、最大限の怒りをこめて飛鳥はこちらにアッカンベーをするやいなや、そそくさと子分を連れて行ってしまった。奴らは（というか女という魔物は、）単体でも十分ややこしい上に、男に今や勝りうる社会的力を持ちながら、なんだってあんなに固まりたがるのだろうか。そう思いながら、女の集団による男の社会的地位の脱落に対する俺が取るべき対策を割りと真剣に考えていると、
「ちょっと、ルイ君も手伝って！お客さん多くて今忙しいんだから。」
と、色気のある声で俺を誘惑するのはそう、我が2年2組の学級委員長でありながら、2年にして生徒会会長をも勤め上げ、さらに成績優秀、おまけにこの学校のマドンナ的存在、屋敷りつ様だ。し

かし如何に彼女だろうとここでほいほいと飼い主に呼ばれた飼いならされた犬畜生のように向かっては男の威厳に関る。ゆっくりと腰を上げ、彼女の方に歩み寄ると、
「何をどう手伝ったらいいですかね。」
と威厳たっぷりにいつもより低めの声で言ってみた。
「あら、風邪でもひいたの？なら休んでていいわよ。今は私がなんとかするから。」
悪気もなくこう言われては、男の威厳台無しだ。
「いや、大丈夫。それより何したらいい？」
もはや完全に今のやり取りで露呈したように、どいつに下げる頭がなくてもこの人には下がってしまう。
「ホント？（ここで屋敷様得意のキラースマイル）じゃぁ氷削る役してもらっていいかしら？」
ここで一番しんどい役回りを言い渡す辺り、さすがこの名門私立、光稜高校の生徒会をしっかりと纏め上げているだけはある。
初めは嫌々やり始めた仕事も意外にやっていると隠された利点に気付くことは多い。この炎天下の真夏日に熱の篭った教室で赤の他人のオーダーするモノをせっせと運んだり金勘定するよりは、力はいるが、唯一涼める氷を扱う仕事をしている俺はラッキーというべきだろう。たまにつまみ食いも出来るし。
「おい、ルイ１４世、俺にもその仕事させてくれや。」
こう言って汗だくのシャツの上にバカみたいにメイドエプロンを着せさせられているありがたいバカは、この光校が誇るバカ、バカの中のバカ、もう一つバカと言っても足りないくらいのバカは俺の小学生からの悪友、吉本である。
「こういう労働階級の仕事はお前には合わないよ。それよりお前のその安っぽいイケメン面をいかんなく発揮できる今の仕事の方が合ってるって。」
「そんなコト言ってまたいいとこを独り占めするつもりなんやろ。」

そしていきなり着ていたエプロンを無理やり俺に着せようとしてきた。１８３センチの長身から繰り出されたエプロンはスポッと俺の体に収まった。

「似合う、似合う。俺なんかより全然似合ってるって。」

そう言ってシャツの袖を捲り上げると、せっせと自分の食べる分の氷を削りだした。

ここでいくらか俺の幼馴染である吉本・レイド・一輝という存在の説明をしておいた方がいいだろう。彼のことをバカ呼ばわりできるのは恐らくこの地球上に俺と飛鳥の二人だけだろう。実際のこいつは長身の日本人とアメリカ人のハーフで、バスケット部のエース、そしてなによりこいつはバカではない。文系科目では常に学年上位をキープしている、恐らく唯一屋敷さんに成績で対抗できるクラスの男子である。しかも誰とでも仲良くなってしまえるような明るい性格の持ち主で、そんな奴が女にモテないはずもなく、こいつが学年、学校問わず何人もの女子達に告白されているのを俺は知っている。しかし奴はいつも同じ理由で彼女達の心を傷つけてきたのも知っている。

「ごめん、でも俺、好きな人がおるから君とは付き合えない。」

なぜそんなクラスの人気者の恋の秘密をなんの取り得もない一介の生徒Ａである俺が知っているのかは、光校七不思議の一角を担ってもおかしくないくらいみんなが疑問に思っていることだ。俺が唯一の奴の昔からの友人だからだろうか。確かに仲はいいが、俺と違って友人には事欠かない奴だ。まぁそんな奴との不思議な腐れ縁は、吉本が大阪から飛鳥と一緒にこの高校に入ってきた時から再び始まった。俺とこいつは小学校の時の友人、そして飛鳥とこいつは中学校時代の友人である。俺達２人が小学校６年生の時にこいつは大阪に引っ越し、向こうの中学で奴らは知り合ったらしい。どうやら二人は中学のとき恋人同士だったらしいが、今はそんなことはないというのが吉本の意見だ。だが俺が言うのもなんだが、この二人は結構お似合いの美男美女カップルだと思う。飛鳥の容姿に対しての周

りの意見は、多くの男子がＡからＦでランク付けすれば、ほとんどの男子が飛鳥をＡにランク付けするであろう美貌だ。
　ちなみに今屋敷さんと一緒にオーダーを取ったり、吉本の作るかき氷をせっせと運んでいるのは、数少ない俺の話すことが出来るクラスメートである、保樹だ。こいつは吉本と違って真性のバカである。奴曰く、飛鳥は学年で５人しかいないＡであり、屋敷さんは光校唯一のＡ＋だそうだ。美貌だけで言えば、飛鳥もＡ＋になってもおかしくない逸材だが、男勝りな性格が減点対象に当てはまったらしい。俺達はこの２年間で学校中のほとんどの女子達のランク付けを終えており、こんなことをこいつとだらだらと話しているうちに俺の成績は飛ぶ鳥を落とすが如く急降下したのだ。この保樹のクソ野郎。
　こうやって悪態をついているうちにも客足は増え、俺達のクラスの出し物であるカキ氷屋さんは文化祭の出し物としては成功を収めて、俺もみんなも笑顔で楽しく過ごしていた平和な夏の午後の内側で、世界は大きく変わり始めていた。

C２（前書き）

新人類Ｃ２とその時代背景。

C2

Ｃ２。これが何の略称かお分かりだろうか。Ｃｈｉｌｄｌｅｎ ｏｆ Ｃｈｅｍｉｓｔｒｙ. これがＣ２の略称である。前章で出てきたこの物語の主人公ルイ、飛鳥、そして吉本・レイド・一樹の三人はこのＣ２である。では、そのＣ２とは一体何なのだろうか。

簡単に言うと人造人間である。つまり人間ではないのだ。しかし、西暦２３１０年の日本国ではこのＣ２であることが日本人である為に最低限クリアすべき基準であるのだ。このＣ２でない人間を日本人は旧人と呼ぶ。これは日本に限らず世界中で起こっている差別である。

Ｃ２と非Ｃ２。この２種類の人間の間に見た目で判る違いは皆無である。ではその違いは何なのか。最大の違いは両者の細胞である。細胞レベルで見るとこの両者は完全に別の生き物と言っても過言ではない。旧人と呼ばれる人々の細胞は、大きくは核と細胞質に分けられる。この核とは細胞という名の組織で言う所の総司令部に当たる。核にはＤＮＡ（Ｄｅｏｘｙｒｉｂｏｎｕｃｌｅｉｃ ａｃｉｄ）と呼ばれる高分子生体物質があり、一部のウイルスを除く地球上の全ての生物に見られる、遺伝情報を担う物質である。このＤＮＡ以外の全ての構造が、Ｃ２の細胞と旧人とで異なる。しかしそれらの違いを全て列挙していたらとてつもない量になるので、大きく違う部分に絞って説明しよう。

Ｃ２の細胞には旧人の細胞にない物質が存在する。それはＳＳＭ（Ｓｕｐｅｒｎａｔｕｒａｌ Ｓｐｅｃｉｅｓ Ｍａｔｅｒｉａｌ）超能人種物質と呼ばれるモノだ。この物質の多くはＣ２の脳細胞に最も見られ、そこから発達したＳＳＭが樹木の根のように体中の全

細胞へと繋がっていく。彼らの超能力の源泉とも言うべき物質で、ここから発生した巨大な電力を軸にＣ２の細胞は通常の人間にない力を発揮する。

この世紀の大発見ともいうべき物質の開発は、２００年以上前に遡る。この物質の研究の第一人者は、日本の歴史上、最も偉大な科学者である小澤龍之介と言われている。彼は、史上最悪の科学戦争と言われる２１１１年に起きた、第三次世界大戦の日本軍科学部の最も優れた研究員の一人で、この戦争によって生み出されたおびただしい数の死体が、彼をある運命的なトピックへと導いた。太古からの人類の夢である不老不死である。彼は、この戦争で、多くの人々の命を奪ったあらゆる化学物質と人間の体との関係性を調べ上げた。彼の目標は、Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｅｌｉｘｉｒ（最後の特効薬）を作り上げることであったが、その夢は達成されぬまま彼はこの世を去った。

多くの科学者達がこの　Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｅｌｉｘｉｒ　に挑戦し、そして敗れていった。だがこの物質への挑戦が、ＳＳＭの発見に繋がったのは言うまでもない。このＳＳＭを全ての妊婦の羊水に注入し、生まれた子供が完全な健康児である場合、Ｃ２かどうかを判断するテストを受けさせられる。このテストは非常にシンプルで、乳児がＣ２である場合、神経細胞に含まれる電力が通常の乳児の何倍も強い。どれくらいの強さかは子供によって違うが、最低でも通常の３倍はある。一般的にこの時強い電力を持って生まれた子供ほど優れた能力を持つと言われているが、細胞内のＳＳＭ含有量は年々変化するものであり、この時期の結果がＣ２としての全てを左右するわけではない。むしろ、後天的な努力によってＣ２としての能力は伸びる。

最も優れたＣ２とはいったいどういう物か。それは神の理論を最

も完全に使いこなせた物だろう。神の理論とは、あらゆる原子同士に働く関連した物理作用であり、Ｃ２はこの理論を極めることを目標とする。

簡単なＣ２という物の説明はこの辺りで終えておこう。ではそのＣ２である三人の物語を次の章から本格的に開幕することししよう。

謎の転校生

午後４時、客の足取りも少しずつ衰えてきた。
「ルイ君、ちょっとそこのスプーン取ってもらえる？」
屋敷さんは今はエプロンをつけたまま、控え室で今までのクラスの売り上げの計算をしている。
「ありがと。今から違う人に代わってもらうから、ルイ君もうエプロン取っていいわよ。」
なんとかこの灼熱の中での仕事も一息つけそうだ。
「ぅあっちぃ～」
吉本がカラフルにトッピングされたカキ氷を３つ両手に抱えてクラス員専用ブースへと入ってきた。見たところイチゴ、ブルーハワイ、そしてレモン味の３つのようだ。
「はい、屋敷。これお前のイチゴ。」
「ありがと、吉本君。」
そう言って吉本が屋敷さんにカキ氷を手渡すところをじっと見ていると、
「お前はどっちがいい？」
「じゃぁ俺レモン。」
「ちょっと、ルイ君そんなもの食べる暇なんてないわよ！」
屋敷さんは自分の分のイチゴ味のカキ氷を右手に大事そうに掴みながら俺の分のカキ氷を左手でひょいと奪った。
「えっ、何だよ。今は休憩時間じゃないの？飛鳥達も帰ってきたんだし・・」
「何言ってるの？あなたパトロールの仕事があるじゃない！」
そう、ここは超能力者開発指定地区のど真ん中に位置する光陵高校での文化祭である。無論、今日訪れた人達の多くは能力者である。こういう祭りごとでは、必ずといっていいほど誰かしらトラブルを起こす奴がいるものである。」

「光陵のエースがパトロールしてくれれば、みんな安心して文化祭楽しめるでしょ？」
「でもそういうの生徒会の役目なんじゃぁ・・」
「でも生徒会メンバーみんなプレナイトクラス以下なんですもの。そんなんじゃ何かあっても役に立たないじゃない。だからこの地区で唯一のマスタークラスの高校生のルイ君にパトロール頼んだんじゃない。あなたならほとんどの能力者なんか簡単に倒せるでしょ。」
「え！学校内で能力使っていいの？」
「はい、これ。」
そう言って屋敷さんは赤色の紋章を手渡した。ジャスティスと書いてある。
「これつけてたら能力使っても先生達にとやかく言われることはないわよ。文化祭を円滑に、かつ安全に進めるために今年から導入した制度なの。去年色々他校の生徒とあったじゃない？だから先生達に掛け合って、今年からジャスティスのメンバーのみ特例として能力の使用を許可してもらったのよ。」
「さすが屋敷さん。」
すっかり彼女の生徒会長としての敏腕ぶりに関心していると、
「だからって本気だすなよ。お前の能力じゃボヤくらいですまないからな。」
と吉本が笑いながら腕章を見つめていた。
「いいな～。俺もセオリスト専門ならひと暴れ出来るのに。」
「恐いコト言わないでよね！それに吉本君はコンダクターとしては凄いじゃない。」
吉本はコンダクターという、俺とは違う種類のＣ２である。ちなみに俺や屋敷さんはセオリストと呼ばれる能力者である。セオリストとは地球上に存在する特定の物質を自由に操作することの出来る能力者のことである。俺は火のセオリスト、屋敷さんは空気を自在に操る。ちなみに能力者にはランクがあり、体の神経とＳＳＭとのシンクロ率と、いかに能力を自分のものにしているかでランク付け

され、それは大きく分けて６段階ある。一番下のシンクロ率０パーセントの人達をオールド、旧人と呼ぶ。その上のシンクロが少しでも見られた人達はビギナーズ、新人と言われ、ここから上のランクが日本人とされる。次はシンクロ率１０パーセント以上の準騎士、プレナイトクラス。このランクはセオリストのような戦闘専門の中では最下クラスで、多くの能力者がこのレベルか、一つ下の新人クラスに属する。シンクロ率２０パーセントを超える能力者は騎士、ナイトクラスと呼ばれ、このレベルの能力者の力は旧人が銃器等を装備したレベルを超える力を持っている為、軍隊での職務義務が発生するが、この義務は高校生以上の人に限られる。このナイトクラスを超えた、シンクロ率３０パーセント以上の能力者をマスタークラス、超人と呼ばれ、このレベルの能力者は能力者の総人口の１パーセントにも満たない。このレベルの一人の力で、小規模の軍隊レベルの力がある。さらにその上、シンクロ率５０パーセントを超える能力者はグランドマスターと言われ、この能力者大国、日本でも片手で数えるくらいしかいないと言われている。さらにこのレベルの能力者はほとんど戦地に行くことはない。グランドマスター同士の戦闘はあまりにも危険だからだと言われている。そして俺はこの地区唯一の高校生でのマスタークラスの能力者というわけだ。自分で言うのもなんだが、これでも結構名の知れたほうで、苗字の黒魔から、魔界の業火と言われている。

「本気なんか出さないよ。それにあと2、3時間もすれば文化祭も終わるでしょ。誰も騒動なんか起こさないだろ。」

「ならいいんだけどね。とにかく早くパトロール行ってきて頂戴！あんまり遅れると相方が機嫌悪くするかもしれないわよ。」

「相方？」

きょとんとしている俺に向かって屋敷さんは控え室のドアを指した。行けば分かるということだろうか。

控え室のドアを開けると、店の中には４人しか客は来ていなかったので、店番は暇そうに自分で作ったかき氷にかぶりついていた。

しかし俺の目にまず飛び込んできたのはそんな怠惰な昼下がりのシーンではなく、教室のドアの所で腕を組んでこちらを睨んでいる飛鳥の姿だった。もちろんその腕には赤い腕章がきらりと光っていた。

「お前も一緒なのか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2638l/

ソムニー

2010年10月9日01時39分発行